

# 大会講演

「西行法師生誕の地」として知られる和歌山県紀の川市の「ホール田園」にて紀の川市短歌大会を開催しました。

今年で八回目を迎えた伊香保温歌大会は、伊香保温泉「ホテル天坊」での開催でした。

両大会ともに、お集まり下さった方々が熱心に耳を傾けておられた講演をご紹介します。

NHK学園生涯学習フェスティバル

## ●紀の川市短歌大会

と き／二〇〇九年四月四日（土）

と ころ／和歌山県紀の川市

演 題 作歌のヒント

講 師 永田和宏先生……3

## ●伊香保温歌大会

と き／二〇〇九年五月二十一日（木）

と ころ／群馬県渋川市

演 題 新しい歌と古い歌

講 師 岡井 隆先生……13



# 「作歌のヒント」

永田和宏

今から五十分くらい、「作歌のヒント」というタイトルでお話をさせていただきませう。とにかく、昼ご飯を食べて一番眠い時間ですが、しばらくお付き合いいただければと思います。

私を含めて今日の六名の選者、みな同じだと思えますけれども、選歌をする機会が非常に多くて、自分が歌を作っている時間よりも、人の歌を読んでいる時間の方が長いかも。非常に惨めというか、そんな生活をしていますが、その中でいろいろなことを感じます。

ちょっとここがどうかかなあ、ここがこうだともいい歌になるのになあとか、あるいは、こんな素晴らしい見方をできる人があるんだと驚いたり……いろいろな歌に出合う機会がとて多くて、私自身は、選歌という作業に、まったくという嘘にな

りませぬけども、あまり苦痛を感じません。むしろ楽しい時間という気がしています。

また後からお話をしますけれども、投稿してこられる方々のそれぞれの生活のすぐ横を走らせていただいている、そんな気がしまして、とても貴重な体験、あるいは時間を過ごしているという気がしております。

ただ、たくさん歌を読んでみますと、どうしても一様に陥りやすい落とし穴——みんなが同じように惜しいところで、いい歌になるのを逃している。そういうことに気が付くことが多くあります。今日は少し、そういう時のヒントのようなものを考えてみたいと思います。

実は今から六年くらい前になりますか、NHK歌壇で選者をさせていただきました。時から、体系だった入門書とは違うのですが、「作歌のヒント」というタイトルで、

選歌の中で気の付いたことを書き続けておりました。四年間ほど書きまして、今日お話をすると同じタイトルの「作歌のヒント」という本を、NHK出版から出していただくことができました。今日はそこに書いたことも一部含めながら、最近新しい歌に出合っただけを感じていることを少しお話しようと思っております。

## 歌が内包している気付きの作用

お手元にレジメといいますが、歌の資料があると便利ですけれども、それを見ながら少しお話をします。中に空白のカッコがある歌もあります。いかにも授業という感じですが、適当に当てますので、そのつもりで……（笑）。

まず「歌は常識が嫌い」という括りで三

首あげておきました。

秋深し菊人形の若武者の横笛いずれ  
も唇に届かぬ 岩切久美子

唇と書いていますが、この場合は「くち」と読むのでしょうか。岩切さんは私たちの『塔』という雑誌の会員です。これ、とてもいい歌だと思っっているんです。はじめて見た時からびっくりしました。この頃は菊人形って、あんまりはやらなくなっていましたね。我々子どもの頃は、よく菊人形を見に連れて行かれました。独特の雰囲気があつていいものでしたね。何となく、うら寂れている感じもあり、会場に行くくと、菊の香りが強く漂っていて、何かちよつと別世界。源義経の菊人形があつて、曾我五郎十郎があつてというお決まりのパターンでして、義経は大体笛を吹いているのですよ。五条の橋の上でね。この歌はそれを詠んでいます。

「秋深し」で始まるのはなかなか格調高いと思いますが、何ととってもこの歌の見所は「横笛いずれも唇に届かぬ」です。菊人形の若武者が笛を吹いている。でもよく見ると、あれ、唇からだいたい離れている、十

センチくらい離れていると。普通はそんなことに気が付かないですよ。最初から笛を吹いていると思って見えますから、唇から少し離れているなんて、そんなことは考えもしない。逆に、もし義経が笛を唇にぴったりつけていたら、奇妙に見えるかもしれない。

歌舞伎でも能でもそうですが、日本の古典芸能というのは、〈型〉で見せるもの。観客が、その〈型〉が何を意味しているのか、観客はみんなが理解している。それが古典芸能です。歌舞伎で斬り合いをするでしょう。でも刀は、相手から一メートルほど離れていますよ。絶対相手に当たらない。当てたらダメなんです。それでいていかにも闘っているように見える。そういう風に我々は訓練されてきているので、パッと菊人形を見た時に十センチくらい離れても、あつ、これでは音が出ないよなあとは思わないわけです。

この歌、何をいいたいのでしょうか？  
義経の菊人形を作った人の不備、リアルに作つてないじゃないか、間違つてるじゃないかということをお願いしたいのではないです

よね。我々がものを見るといふのは、あつ、こんな風に〈型〉で見ていたのか、ということに気付かせてくれる。これが、この歌の持つ一つの意味だと思ひます。

我々は菊人形の笛と唇が十センチほど離れているということにすら気が付かないで、物事を知識や型で見ている。こういう一首を読むと、先入観なしにものを見るといふのはいかにむずかしいものなのかということに、はつと思ひあたる。歌にはこういう作用というのが、一つ、厳然としてある。

私はこれを「氣付き」、氣が付くという風にいつていますけども、氣付かせてくれる、つまり我々がいろいろなものを見る時に、常識的な見方でしかものを見ていないということに、改めて氣付かせてくれる。こういう一群の歌があると思ひます。

人生が豊かになる喜び

同じ括りの二首目、これは吉川宏志さん、今日の大会の選者の一人で、私たちの短歌会の選者の一人でもありますけども、

彼はこういう気付かせをしてってくれるのが、非常にうまい作者で、彼の歌によって、「おおっ！」と思うことがいっぱいあります。

彼がまだ二十代を越えたか越えないくらいの若い時に作った歌だと思います。

円形の和紙に貼りつく赤きひれ掬われしのち金魚は濡れる 吉川宏志

金魚掬いの歌ですね。金魚掬いって掬うでしょう。で、我々ね、普通は、金魚は水の中を泳いでいるのを見ている時、金魚が濡れているとは思わない。あ、この金魚は濡れながら泳いでいるんだとは、なかなか思わないですよ。



「金魚は濡れる」という表現そのものもすごいですけれども、私がびっくりしたのは、「掬われしのち金魚は濡れる」という、ここですね。金魚掬いの白い紙の上に、金魚を掬った。その時、濡れた金魚が掬われてきたというのとは違うんですね。水の中にいる時は濡れているか濡れていないか分からないけれども、引き上げた時に金魚が濡れたんだと感じる。

「掬われしのち金魚は濡れる」、このいい方は素晴らしいと思いましたね。そういうえば、金魚は水の中にいる時もひよっとしたら濡れているんだろうか、ということを考えさせます。そんなことを考えて何ほのものでもない。そんなことを知ったからといって、何が得したってわけでもないのですけれども（笑）。

金魚は、水という環境の中にいる時は、別に濡れてないんだけれども、水から強制的に出された途端に、全身が濡れたんだという感じ。この歌に出合わなかったら、そんな感じ方があるなんて、誰も思いもしませんよ。何にも感じないってことは、やっぱり不幸なことだと思いませんか。

今日ここに来られた方は、次に金魚を見た時に、今までと違って何か金魚に感じるものがありますよ、きつと。それだけでも、人生豊かになると思いますね。

自分が歌を作る時って、歌を作るということについては皆さん、すごく熱心に考えおられる。どうしたらいい歌ができるだろうかと。でもね、我々歌を作っていることの半分くらいの意味は、人のいい歌を読む、人のいい歌に出合う、この喜びです。

私も自分の時間を削るようにして、人の歌を読んでいますけども、やつぱりね、時々とんでもなく素晴らしい感じ方をしてる歌に出合えることがある。出合った時に、おっと思つて世界観が変わる。そのことは、自分が歌を作り、また人の歌を読むということの喜びのかなり大きな部分だと思つています。

次の歌もそういう歌です。私の好きな歌で、あっちこっちで吹聴して廻つてるので、すけども。

黒き月を三日月抱けり起伏なき日々重  
ね人はこころ病みゆく 高野公彦

起伏のない日々、毎日毎日同じような日

常を重ねながら、人はこころ病む。これは、感じられることですね、分かる歌ですね。この歌の驚きは、「黒き月を三日月抱けり」という表現ですね。夜、空を見て、「あ、今日は三日月だ」と思った瞬間に、照ってる方の月しか見なくなっちゃう。三日月って言った途端に見方が固定してしまうのです。

だけど、虚心坦懐によく見ると、あの三日月の内側には、三日月が抱くようにして黒い月がもう一つあると、高野公彦は言う。陰の部分ですね。私はこの歌を読んで、ハッと思わせられたのを鮮明に覚えてます。あ、そうか、三日月の内側にはもう一つ黒い月があるんだということに、非常に衝撃を受けました。これは高野公彦に指摘されないとなかなか思えなかった。理屈では分かっているんですよ。理屈では、月が地球の周りを回っている、満月の時もあれば、新月、それから段々と三日月が出て、上弦の月になり云々と。

大体が、理科の教科書でも、三日月はこういう形でと、照っている方しか出てこないですね。黒い月の部分は書いてない。だ

けど、そういえばいつも月には照ってる以外の、もう一つの月もあるんだということに改めて気付かせてくれた。

こういう発見を上の方に置いて、下の句を読んでみると、「起伏なき日々重ね人はこころ病みゆく」が、一つの解釈ではなくいろいろに解釈できる。たとえば、自分が三日月のように照っている部分だとしたら、自分の内側には、自分には見えない、何か黒い心のマグマのようなものがある、という風に取り取る人もあるかもしれない。あるいはもっと単純に、そんな黒い月の存在にも気が付かないで、平凡にただ、三日月だ三日月だって言っていて喜んでいた自分の自分って一体何だろうかという解釈の仕方もあるかもしれない。解釈の仕方はいく通りもあって、それは読者次第だと思いません。

この歌で大事なのは、そういう普段我々が、陰の部分としてあまり注意を払わないところ、そういうところに気が付くということが、いかに驚きであるか、衝撃を讀者にもたらしてくれるか。これには非常に注意深い目が必要ですけども、注意深い目だ

けでは駄目なのです。

何というか、ボーッと見ているということも必要で、何か探そう探そうと思つて探しても見つからない。自分の主観とか感情とかを、どこかで少し空虚に浮遊させながら、しかし一方で、どっかで視線のアンテナをしっかりと張っていないと、こういう気付きというのは向こうからやって来てはくれない。

不思議なものでね。見つけよう見つけようという、もの欲しげな目では駄目で、このあたりがやはり訓練になつてくると思います。それじゃあどんな訓練をすればいいのかというと、こういういい歌を読むというところがとても大事です。

「雑草という草はない」と言ったのは、昭和天皇だそうです。いい言葉だと思えます。我々、道を歩いていても、初めから雑草だと思つて過ぎていると、何も見えてこない。草のそれぞれの顔が見えてこない。でも草の名前を知っていると、ああイヌノフグリがあるとか、ホトケノザ、ケマンツウ……。一つ名前を知つただけで、その風景がとても親しく立ち上がってくる。歌

を一首知ってるだけで、風景が全然違う見  
え方をしてくる。これが人の歌を読むもう  
一つの大きな喜びだと思っています。

今日、たまたま娘と喋っていて、大学の  
校内に馬術部があつて、いつもそこを通つ  
て通っているのですが、娘が「道草を食  
うって言うけど、本当に馬は道草を食うん  
やね」と、すごく感動してました（笑）。

どこかで、ちよつと違ったものの見方が  
できるというか、当たり前として過ぎてい  
たものにとこ違う光を当てられる——こ  
ういう風になると、歌というのはとてもよ  
くなります。なかなかこういう発見とい  
うのはできないですけども、こういうもの  
の見方もできるんだと思ひながら風景に漠  
然と接していると、時たまいい歌ができ  
てきます。

### ただごと歌の魅力

次は、「あたりまえこそ面白い」という  
括りで四首あげてあります。空白のところ  
がありますので、会場の誰かに答えていた  
できます。

次々に走り過ぎゆく自動車の運転す  
る人○○○○○○○○ 奥村晃作

最後の七音、どうですか。ああ、すごい  
な、皆さんよく知っておられる。そうで  
す、答えは、「みな前を向く」です。

後ろを向いていたらどうすんねん（笑）。  
奥村晃作という人は、こんな当たり前なこ  
と、当たり前な認識を歌にして喜んでい  
る歌人です。あまりに当たり前過ぎてはかば  
かしい歌ですが、でもね、笑つちやうで  
しょう。笑つてしまつて、ハッと気が付く  
わけです。こんなあんまり当たり前過ぎ  
て、運転する人はみんな前を向いてると  
いうことすらも、我々は普段、気が付い  
ないわけです。

車道に面してじつと立っている。どん  
どん車が過ぎていく。次から次へと過ぎて  
いって、なかなか横断歩道が青になら  
ない。その時に、「おお、この運転手も次  
の人も前を向いている。あつ、つぎも前  
を向いている」って感動してるんですね。  
これがなかなかすごいことで（笑）、私は  
この歌はすごく好きなのです。運転する人  
がみんな前を向いていると知つたからつ

て、別にうれしいことも何もないし、何の  
知識量の増加にもならないのだけれども、  
ただそう思つて見ると、みんな前向いて  
なと思えることがすごい。

会場の何人かの人は、次に横断歩道に  
立つた時に、きつとこの歌を思い出しま  
すよ。思い出したらしめたものです。「あ、  
奥村晃作という変な歌人がいた。彼は、み  
んな前を向くという歌を作っていた。上の  
句、何やつたつけ」と思ひながら、見るわ  
けですよ。そう思えるつてことは、先程の  
高野公彦流にいうと、起伏なき日々にひ  
じょうに大きなインパクトを与えてくれる  
じゃないですか。楽しくなりますよ、風景  
が。世の中を見ているのが楽しくなる。こ  
れがこの歌のいいところだと思いますね。

同じ作者の歌です。  
信号の赤に対して自動車は次々止ま  
る○○○○○○○○

結句に何を入れたらいいでしょうか。  
「青になるまで」「足踏みをする」……。  
うーん、いろいろ考えられますね。奥村晃  
作はこんな風にいつている。「前から順  
に」。

当たり前（笑）。前から順に止まらんでどうすんねん。でもね、なるほど、奥村晃作すごいな、と僕は思っているんですよ。確かに、前から順に止まってますよ。後ろから順に止まることはまずない。今言ったように、この歌を読んで、得をしたことがあるかといったら、何も得することはない。一銭の得にもならん。でも、次に信号に出合った時、おっ、前から順に止まってるって思えたら、なんかすごく得した気分になりませんか。今日ここへ来るのに電車賃を払った甲斐があったというもの。それぐらい得だと僕は思いますね。

こういうのは、どうでもいいことなんです。で、どうでもいいことというのは、歌になるかどうか投稿歌をみていると、大部分がどうでもいいことでして、どうでもいいことの大部分は落とされます。それは、どうでもいいことをなぞってるからです。たとえば今日、朝、顔洗って、それから学校へ行った。小学生の短歌って、大体こんなのですよ。これ、なぞっているんですよ。これじゃ駄目です。

どうでもいいことの中に、作者が何かを

気付く、見つける、発見する。なぞるんじゃないなくて、気付くということがとても大事なこと、そのことを前提にして初めて、どうでもいいことは詩になる。

### 詩の表現の多様性

『作歌のヒント』の中にも引用したのですが、佐藤佐太郎さんという有名な歌人がおられる。「歩道」という結社を作られてますよね。私は佐藤佐太郎は、近代の歌人のなかで、歌の生理というのが最も分かっている歌人だと思っています。佐藤佐太郎にこういう言葉があります。

詩の表現は大切なものだけを言うのだが、言っても言わなくてもいいよ  
うなことを言うのも詩の表現である。

そう佐藤佐太郎は言っている。これはひじょうに大事な言葉だと思えますね。皆さん歌を作ろうと思うと、あまりにも構えてしまつて、自分が一番大事に思っていることだけを何とかいいたい。こんなすごい体験をして、こんなに辛い思いをして、こんなにうれしい孫ができて、こんなに大

事なことだから、これを何とかいいたい、と思うわけね。こればかりに捕らわれていると、歌が窮屈になる。

自動車がやって来て、赤信号で前から順に止まってなんて、こんなのどうでもいいことですよ、本当に。でもこういうどうでもいいことをいうのも詩の表現であると佐太郎は言っていると思います。

私もどうでもいいことを歌ってるのに、何で先生は採ってくれないんだ、と言われるでも困るわけですけど、どうでもいいことの中に、作者が何か自分で見つけたことというのがあつてほしい。そうするとどうでもいいことが、とても引き立ってきます。

連結をはなれし貨車がやすやすと走り  
つつ行く線路の上を 佐藤佐太郎

佐藤佐太郎の有名な歌です。奥村晃作調なんです、さすがに佐藤佐太郎の方が格調高い。

夕暮れの操車場に近いところで、連結されていた貨車が外されて惰性で走って行くんでしようね、おそらく。ある種の雰囲気がありますね。夕暮れ、貨車が一两だけ

走って行く。でも、こういう歌を歌会に出すところぴどくいわれる。「線路の上を走って当たり前」、「そんなこと言わなくていい」「道の上を走るわけないんだから」等々。結局は余分だと言われるでしょうね。

ただ余分なことまで念を押すように言われることで、すぐリアリティが出てくることがある。あるいはそのことよって歌がひじょうに立ち上がってることがあります。こういうことはとても大事な歌の生理だと思えます。

駅は大きく姿を変えていたれどもト  
イレのありし場所に駅長室あり

松村正直

松村正直君の歌です。彼は私たちの仲間ですが、雑誌「塔」に最近載ったものから引いてみました。

なかなか面白いでしょう。これね、時間がないので先に種明かしてしまいますけど、「駅長室あり」は嘘です。これは私が作ったのです。元の歌はこうじゃなかった。「トイレのありし場所に」何があったと思いますか。「トイレあり」です（笑）。

駅は大きく姿を変えていたれどもト

イレのありし場所にトイレあり

松村正直

おお、すごいなと思ったんですね。駅は大きく姿を変えている。何十年振りかできてみると、昔トイレがあった場所に、やっぱりトイレがあった。改装してすっかり様子が変わってしまった駅舎だけれど、なじみの場所にやっぱりトイレがひっそりあった。作者はそこに感動した。まあ感動とは言えないですけどね（笑）。あ、トイレの場所はやっぱりトイレなんだという風に、何十年振りかできて来て気が付いた。その気が付き方がいいじゃないですか。とても私はいいと思えました。

こんなのは、まさに取るに足りないこと、二東三文ですよ。認識しても何の価値もない。でも、そんな風に感じるということが、ということは、我々、日常生活の中で、やっぱり気が付いているわけです。こういう歌が作れるということは、歌は大事なことでだけをもっともらしくいうものだという固定観念から、ちょっと抜けてしまわないと、作れないですね。

歌は読者に手渡すもの

くつついた餃子と餃子をはがすとき  
皮が破れるほうが私だ 相原から

これも変な歌でね、実は私が作りかえたのです。「皮が破れるほうが私だ」——つまり、何かあることがあって、何か無理に解決しようとする、いつも傷つくのが自分だ、と。よく分かる歌になったでしょう。

これ、私が改作したからよくなったんだけど（笑）、でも、原作はもつといいのです。原作は「くつついた餃子と餃子をはがすとき皮が破れるほうの餃子だ」。ちょっと書いておいて下さい。「皮が破れるほうの餃子だ」というのが原作。

でも、「くつついた餃子と餃子をはがすとき皮が破れるほうの餃子だ」だと、何が何だ、と言いたくなる。作者はそれも含めて、私は皮が破れるほうの餃子なんだ、と言ってる。「皮が破れるほうが私だ」というと、一遍に分かってしまつて、それでもいいんですけども、作者は「皮が破れるほうの餃子だ」と言つて、そこで一回、間を



おいて、何がその餃子なんだというところに読者を巻き込んでく。

今日のもう一つの話の大事なポイントは、読者を巻き込まなければ駄目だ、ということですよ。

つまり、歌というのは、自分で立とうと思つたらダメなんです。自分で完結してしまつたら、いい歌はできません。歌というのは、読者に手渡すものです。読者に手渡すということをいつも考えながら、歌を作ると言うことがとても大事です。自分でいくら素晴らしい歌だと思つても、自分で完結してしまつたらダメなんです。

時間がないので、「画面の隅に目を凝らせ」のタイトルの四首から、一首だけ言っておきましょう。

社会詠というのは、私はすごく大事だと思つています。オバマ大統領になつたとか、テロがあつたとか、湾岸戦争があつたとか、いろいろな社会の事件を歌にされる方が多いです。数年前の流行は「イナバウアー」でした。その次の年は「千の風」で、去年は「後期高齢者」でと、新聞歌壇は特に消長が激しいのですが、みんなが同

じ事件に向かつて歌を作る。だけど大部分は、テレビ画面からですよ。NHKでもテレビの画面の中央に伝えたい情報を置きます。そんな画面を見る時、みんな画面の中心に見るから、みんな同じ歌しかできない。

歌になる素材というのは、画面の端っこの方にある。隅っこにある。画面の隅の方に目を凝らせ、と私は言っています。

宙に浮く力士のむこうの観客の大口  
とじることなき写真 坂本捷子

これは朝日歌壇で、私が年間賞に取つた歌です。分かりますよね。新聞ですよ、これ。力士が投げられて宙に浮いている。朝青龍が浮いているのかもしれない。写真は、その力士を撮っているんだけど、その向こうに、「ああ」と大口を開けている人が写っている。「大口とじることなき写真」、いいでしょう。宙に浮いた力士を撮っているのですが、写真が残る限り、あの人、一生大口を開けてるねと（笑）。

年間賞なので作者のインタビューがあつたのですが、その作者の弁を聞いて、ぎゃふんと思いました。作者は、私が『作歌の

ヒント』の中で、「画面の隅を見よといったので、それを実践しましたと。ですから、皆さん、この本を読むと歌がうまくなりますよ。これはコマーシャルですよ（笑）。

もう一つ、大事なメッセージは、歌は読者に手渡すものだということです。歌つて、自分で決着をつけたら駄目なんです。そうすると人に手渡せなくなるからです。こうなのかなあ……、と言いながら手渡すぐらいの感じが一番いいわけです。

非常灯にいつも走っている男走りつづけて○○○○○○○

なぜか男がいつも走っている。「走りつづけて」どうだと思えますか。皆さんなら、何をつけますか。

原作は「疲れておらん」です。これでは歌にならない。「走りつづけて疲れておらん」と、作者が決着をつけている。これじゃあ、もつた方は全然うれしくない。僕だったら、ベストとは思わないけど、たとえば、「その先の海」とかね。ドアの向こうに海があるかもしれない。「走りつづけてその先の海」とか何とかすれば、もう

ちよつとよくなるだろうと思うのです。

つまり、自分で決着をつけてしまったのは相手に渡せない。あるいは、自分で決着をつけてしまったら相手に渡すのが失礼だ、くらいに思つて下さい。その呼吸がとても大事だと思ひます。

早寝して子はみづからの歳月を生き始めをり○○○○○○○ 高野公彦

これは、娘さんが就職が決まつて、入社式の前の日、これから新しい生活に入ろうとしている。今日は早寝して、明日に備えているといった歌ですね。

さあ皆さん、結句は何ですか。「まさきくあれよ」なんてつけないで下さいね。頑張れとか、親ならそんな風に言いたい。あるいは心配だとか。この結句は、「夜の霞草」です。

何の関係もないでしょう。明日から娘が新しい生活に入る。待ち受けているであろう、いろいろなことを考えると、親としてはいろいろなことを思う。それを一切封印して、「夜の霞草」と歌う。「夜の百合」だったらまたちよつと違つてくるのですが、かすみ草つて、何か輪郭がなくて、ど

こかはやーんとしてという感じもしますね。でも、霞草に意味があったのではないですね。霞草が本当にそこにあったというでもない。

有体にいえば、本当は菜の花でもよかつたのかもしれない。でも作者はおそらく文脈とは関係のない花をおくことで、その歌を讀者に手渡して、あなたならどう感じますか、ということ、問うているのだと私は思ひます。

そのためには、これからの将来が心配だとか、楽しい生活を送つてほしいとか、作者が落とし前をつけないで、それをあえて中に閉じ込めておいて、「夜の霞草」という、讀者と握手する何か一つの道具をそこにおいた、そんな感じがします。

### 読者を信頼して

歌というのは一人立ちしないものだと思つて下さい。歌というのは、放つておいたら倒れるものだ。それを支えてくれるのは讀者です。だから、倒れるぐらいがちょうどいいので、どつしりと根を下ろして、

押しも引いても倒れないような歌は何の面白味もない。ちよつと危うくて、何か讀者が手助けしてやらないとその歌が解釈できないぐらいの、それぐらいのところ、讀者に手渡すのがいい。

私は、歌は自分で責任をもたない。むしろ無責任にお作り下さいと言つています。「そんな無責任な！」と大部分の人は怒りますが、でも歌は無責任なくらいがちょうどいい。無責任だと思つていくぐらいで、作者のいいたいことはかなり出てきます。それぐらいのつもりでお作りいただくといいですね。

つまり、読者を信頼するということです。あとで選評が行われると思ひますが、選者といえども、おそらく自分の歌はよく分からない。私もそうですが、でも人の歌は分かるんです、なぜですかね。そういう選者を信頼して、自分で落とし前をつけないで、「あなた解釈してよ」くらいのつもりで歌を出して下さい。それがすごく大事です。

そういう例として、一首だけ言つておきましょう。

ゆふぐれに櫛をひろへりゆふぐれの櫛は  
わたしにひろはれしのみ 永井陽子

好きなんですね、この歌。素晴らしい歌  
だと思う。まったく上の句と下の句と同じ  
ことをいつています。夕暮れに櫛を拾った  
私。夕暮れの櫛は私に拾われたただけだ、  
と。内容的には何もいつてないですね。夕  
暮れに櫛を拾った、そのことは別に大事な  
ことではないんですよ。量の大きさという  
ことで言うと、上句下句で同じことを逆に  
言えば、当然盛り込める情報の量は少なく  
なる。

でも、そうではなくて、櫛は私に拾われ  
た、この時の感じというのを、読者と共有  
したいというのが、永井さんがこの歌を出  
した一番大きな意味だと思っています。永  
井さんはこの時どういう状態であったの  
か。残念ながら彼女は、若くして自ら命を  
絶ってしまった。そんな彼女の心のあり方  
を、あれこれ詮索してほしくないが、夕暮  
れに橋の上で——橋の上とはいつていませ  
んが、何となく橋の上って感じがしたけ  
ど——櫛を拾った。櫛は私に拾われた、とい  
うことで、何かその時のある雰囲気みたい

なものを感じられれば、それでいい。重大  
な永井さん自身のメッセージが込められて  
いるというのではなく、どう取ってもらっ  
てもそれは読者の自由、そんな読みが永井  
さんの希望だというふうに思っています。

最後に私の歌を一首。

ねむいねむい廊下がねむい風がねむ  
い ねむいねむいと肺がつぶやく

永田和宏

何の情報もない歌です。でも自分ではわ  
りあい気に入っている歌です。とにかくど  
こへ行っても何を見ても眠い。息をする時  
でも、肺の内側から眠い眠いという言葉が  
出てきそうなくらい眠い。そんな時があっ  
て、あなた方もそんな時があるでしょう、  
という気がするんですね。自分のある時の  
感じに照らして、読者が「あ、そんな歌が  
あったな」と、どこかで思い出してくれる  
ととてもうれしいと思っています。

後半、急ぎ過ぎてしまいました。言  
いたかったのは、歌というのは、決して自分  
一人で作るものではないということを確認  
をしておきたい。つまり、歌というのは、  
読者があってこそ成立するので、読者が読

んでくれないような歌、つまり作者が全部  
自分で言い切ってしまった、読者が付け加  
えるものがないような歌には魅力がないん  
だと、いうことです。

それには、言い足りないくらい、ある  
いはちよっと無責任に投げ出したくらい  
の方が、作者がいいということが読者が  
入っていつて、ちよつどいいくらいかもし  
れないと思つています。つまり、我々が歌  
を読む時に、読む側が歌の中に入れないと  
ちよつとも面白くないですね。歌集一冊読  
んでも、もうその人だけで、自足してい  
るような歌集というのは、ほとんど魅力がな  
い。

自分がこの一首はこんな風に解釈してあ  
げないといかんのじゃないかと思いが  
ら、一首一首に手を貸してやる、身を入れ  
て読んでいけるような歌が、一番魅力的で  
す。

そういうことを、少し心に留めておいて  
いただくと、いいのではないかと思つて、  
言い足りないことがたくさんありますが、  
これで終わらせていただきます。